

和

漢

薬

6

2009 No.673

wakanyaku

大地の恵みが からだに優しい



リュウサ

太陽と、土と、水と42 山本廣史
学者そして臨床医としての大塚恭男 渡辺賢治
関西レポート (69) 第15回 国際東洋医学会に参加と御支援を！ 中田敬吾
中国新疆ウイグル自治区におけるマオウ属植物調査旅行3 御影雅幸
『家康秘薬』⑪ 一 権力者たちが追い求めた名薬 山崎光夫
森野舊薬園ぶらりぶらり 中西準治

学者そして臨床医としての大塚恭男

慶應義塾大学 医学部 漢方医学センター 渡辺賢治

義父大塚恭男は平成21年3月8日早朝に自宅のベッドの上で亡くなった。眠るように穏やかな顔だった。納棺されても本人はまだ眠りの延長にあるのではないかというくらい穏やかな顔で、本当に生前の人柄のままであった。

和漢薬に「大塚医院とウチダ和漢薬」という座談会を載せたのが、最後の記事になってしまったが、本当に最後まで漢方を愛していた。幼少時よりからだは丈夫で、小学校は皆勤賞。義母から聞いた話では結婚以来50年間、自分で服む以外は最後まで医療機関にかかることなく、人生を全うした。導いてくれた住職をして「こんな往生をしてみたい」と言わしめた。

私にとっては師であり、義父であり、この14年間は同居していたが、人に怒ったり怒鳴ったりする姿はついぞ見る事がなかった。旧制一中、一高、東京大学時代の学友、第一内科、日立病院、薬理学教室での同僚、そして長らく勤めた北里研究所での同僚や数多くの弟子たち、多くの友人や同僚に恵まれ、いつも感謝の言葉にあふれていた。日本東洋医学会が日本医学会総会に加盟した時も東大時代の先輩後輩たちが応援してくれて嬉しかった、と話していた。決して人の悪口を言わない人で、晩年もよく誰々はいいやつだ、とかあの人にお世話になった、と感謝ばかり話していた。

漢方のみでなく、東大で薬理学と内科を修めたことも大きく、漢方に現代薬理学の光を当てる先鞭をつけただけでなく、医史学にも造詣が深く、「萬董不殺」に代表される、薬理学的考察や東西の生薬比較は後世に残る仕事となった。この仕事も語学の才能があったからこそその仕事であろう。普段は口下手であったが、飲むと雄弁になり、すらすらと論語や漢詩を誦んじたり書いたりしたものである。

語学の才能は漢文だけでなく、ドイツ語はドイツ人から大学教授よりも上手だと褒められ、その他フランス語、ロシア語、英語に秀でていた。私が米国に留学している時に訪米され、ある会で話すのに本人は英語が喋れないというので、一生懸命原稿を書いたところ、会が始まったらすらすらと流暢な英語を話し始めたの

には参った。別に私を試すつもりではなかったのだろうが、英会話力も相当なものであった。

親友の元東大総長・文部科学大臣の有馬朗人氏から「茂吉好きの博覧強記の人」(日本経済新聞2009年3月28日夕刊)と称されるほどであった。



今回の訃報に対して、ドイツのウンシュルト教授、カナダのマックギル大学のマーガレット・ロック教授、スペインのエバハルト先生、イギリスのソリアノさん、ドイツのライセンウェバー先生、アメリカのプロトニコフ先生からも弔意の連絡や花が届けられ、国内外で惜しまれた。

通夜、告別式には三笠宮親王からのお花を前に有馬朗人氏はじめ天皇陛下を手術された元東京大学外科教授森岡恭彦氏や北里研究所社主の北里一郎氏や大村智名誉理事長など高名な方々に混ざって多くの患者さんに御参列いただいた。訃報に接した患者さんから花や弔電が全国から届いき、今だに大塚医院で焼香をさせて欲しいという患者さんがいらっしやる。

学者としてだけでなく、一臨床医としての人生も全うした証として、故人が大変に喜んでいることであろう。

今の時代、79年の生涯は短くもあるかもしれない。しかし人間の一生の価値はその長短ではなからう。多くの業績を残し、多くの患者さんから愛され続けた人生は幸せだったのではないだろうか。

故人は食事と散歩以外はいつも勉強しており、家中本だらけで床が抜けそうなほどの蔵書量であったが、「若い人は酒も飲まないし勉強もしないし、何をやっているのかね」と生前よく口にしていたことを思い出す。その遺産を引き継ぐ者たちへの叱咤激励と捉え、気を引き締めて今後の漢方を真剣に考えなくてはいけないと思っている。

経 歴

昭和5年1月29日	大塚敬節と福栄の長男として高知県香美郡日章村田村に出生	昭和51年4月	北里研究所部長（～昭和55年3月） 北里研究所東洋医学総合研究所基礎研究部長（～昭和52年6月） 昭和大学薬学部兼任講師（和漢生薬学）（～平成7年3月） 信州大学医学部講師（～昭和52年3月）
昭和6年 5月	父、敬節に伴い上京（牛込区船河原町6）	昭和52年7月	北里研究所東洋医学総合研究所臨床研究部長（～昭和59年3月）
昭和17年3月	東京市立津久戸国民学校卒業	昭和53年6月	厚生省中央薬事審議会臨時委員・一般用医薬品再評価調査会委員（～平成5年10月）
昭和22年3月	東京府立第一中学校卒業	昭和54年5月	厚生省特定疾患スモン調査研究班班員
昭和23年3月	旧制武蔵高等学校入学	昭和55年9月	厚生省中央薬事審議会臨時委員・漢方生薬製剤調査会委員（～平成5年10月）
昭和23年3月	旧制武蔵高等学校1年時終了後中退	昭和56年4月	北里大学客員教授
昭和24年3月	旧制第一高等学校入学	昭和56年10月	北里研究所東洋医学総合研究所基礎研究部長
昭和24年3月	旧制第一高等学校修了（学制改革による）	昭和57年4月	北里研究所東洋医学総合研究所副所長
昭和26年4月	武蔵大学教養部入学	昭和57年4月	北里研究所東洋医学総合研究所副所長
昭和30年3月	東京大学医学部医学科入学	昭和58年4月	北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室室長
昭和31年3月	東京大学医学部医学科卒業		
昭和31年3月	インターン終了		
昭和33年4月	東京大学付属病院第一内科（田坂内科）勤務		
昭和33年4月	日立製作所病院内科		
昭和37年3月	東京大学大学院医学博士課程（薬理学）入学		
昭和37年3月	東京大学大学院医学博士課程（薬理学）卒業		
昭和40年9月	ウィーン大学医学部薬理学教室留学		
昭和41年3月	帰国し、4月より東京大学医学部薬理学教室勤務		
昭和42年4月	修琴堂大塚医院副院長・横浜市立大学薬理学教室非常勤講師		
昭和43年4月	日本東洋医学会理事		
昭和47年4月	北里研究所東洋医学総合研究所入所（非常勤）		
昭和48年3月	独協大学非常勤講師（医史学）		
昭和49年4月	北里研究所東洋医学総合研究所各員部長		

昭和59年4月	北里研究所理事 日本学術会議医学教育・医史学研究連絡委員会委員	平成 3年 4月	東京都衛生局東洋医学検討委員会委員
昭和60年1月	医道顕彰会副会長	9月	日本学術会議医薬研究連絡委員会委員
昭和61年4月	北里研究所東洋医学総合研究所診療部門長（兼務）	平成 4年 8月	和漢医薬学会大会会長
昭和61年8月	北里研究所東洋医学総合研究所所長	平成 5年 6月	北里研究所副所長
昭和62年4月	日本東洋医学会会長	平成 6年 4月	和漢医薬学会理事
昭和63年9月	日本学術会議精神医学研究連絡委員会委員	8月	国際アジア伝統医学大会会頭
平成元年5月	日本東洋医学会副会長		
平成元年7月	チェコ科学アカデミー プルキンエ賞受賞		
平成2年4月	東亜医学協会理事長	平成 7年 6月	日本東洋医学会理事
		平成 8年 6月	北里研究所東洋医学総合研究所名誉所長
		7月	修琴堂大塚医院院長
		平成21年3月8日	没

ウチダ和漢薬は創業以来約60年間、漢方の復興期から大塚医院に生薬をお納めさせていただいている中で、大塚敬節先生、大塚恭男先生、渡辺賢治先生と長きに渡りご指導、ご教授をいただいております。そんな中、この度の大塚恭男先生のご訃報はただただ残念に思うばかりです。大塚恭男先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 和漢薬編集グループ